

志賀直哉「小僧の神様」論

——文学作品の語りと教材化をめぐつて——

山下航正

はじめに

教員は、教材に対してどれだけの意識、姿勢で臨んでいるだろうか。より具体的にいえば、教材研究（教材理解・教材解釈）にどれだけ真摯に取り組んでいるだろうか。このことは、全ての教員が自覚し、手を緩められないことであるはずだ。だが、昨今の教育現場における様々な問題・状況のなかで、安易に指導書に頼ってしまいい、手薄になりがちであるのも事実である。

この問題に関わるものに、五味淵典嗣氏の指摘がある。氏は、このような事態を直接の対象とはしていないが、文学教育の転回と希望を論じる中で、前任校である中央大学附属高等学校での「高校在学中の三年間で（半ば強制的に）一〇〇冊の読破を要求する『課題図書』という制度」を元に、次のように言う。

おそらく、教員の個別的な場面にも同じことが言える。ありていに言つて、この（国語科）の企ては、生徒の側にかんがひの経済的・時間的・精神的負担を強いている。教材に教科書を使

わないことの方が多いので、必ずしも専門性が求められているわけではないし、大学と違って自分の意志で履修を辞退できない高校の教室で、なぜその作を《精読》するのかという問いは、つねに教室に潜在している。「課題図書」についても、メディアとしての本の特性を大事にする観点から、できるだけ購入し、手元に残すよう言っている。そのためよけいに、なぜその本を買って読ませるのが問われる。実際に、生徒・親・関係者から、選書に対する批判の声を聞くことは少なくない。

けれども、こうした類の問いに対して、すべての人間を納得させ、満足させる答えは存在しない。とくに、近視眼的・即時的な有用性を期待する声には、ほとんどまったく応えられない。だが、よく考えるなら、かりに教科書しか使わない現場だったとしても、同じ問いは問われうる。少なくとも（国語科）の高校教員は、教科書を選ぶ現場で影響力を行使することも、扱う教科書を選ぶこともできる。つまり、行為者として考え、選択し、判断し、決定する余地がある。授業として何を取り上げ、どの程度の時間をかけるのかは、原理的にはすべての教員

に問われており、そこに根拠などはない。〈読書指導〉として本を紹介する際も同じである。(傍線は引用者、以下同)

五味湖氏の主張を一言で言えば、教材選択における教師の説明責任ということである。それは、教員の所属が私立に限らず公立であっても、また高校に限らず小学校・中学校であっても該当することである。

五味湖氏が指摘する教材選択の説明責任は重要である。そして説明責任ということでは、教材の〈読み〉についても言えるのではないかと考える。しかし、教師の〈読み〉を重視しすぎると、正解到達主義、須貝千里氏の言うエセ価値絶対主義に陥ってしまう。かといって、ロラン・バルトのいう「容認可能な複数性」を認め、エセ価値相対主義に向かうわけにも行かない。

この問題の向かう先、あるいは問題の根底には、「文学の読みとは何か」というアポリアがある。すなわち、文学教育研究と文学研究の関係性が自明のこととされ、それゆえに等閑に付され見えなくしてしまった、両者を繋ぐ根底としての文学の読みの原理的研究である。それは本来、文学教育研究のみならず、文学研究の課題でもあった。渋谷孝氏が「文学作品の根拠は、作品に内在するのか、読者の意識に内在するのかという二者択一の議論はしない」と述べる背景はここにある。

私は、このアポリアを解く鍵となるのが、文学の読みにおける〈語り〉あるいは〈語り手〉であると考える。〈語り〉も〈語り手〉もあらゆる文学作品に存在し、読者は、現象としての〈語り〉あるいは物語の読者への媒介者としての〈語り手〉を通して小説を読み

進めていく。つまり、小説の読みを支えるのが〈語り〉あるいは〈語り手〉だと言えるからである。そしてこの観点を踏まえると、先の二つの教師の説明責任を果たすこともできる。当該文学作品の〈語り〉の構造・特質を明らかにすると共に、その〈語り〉が読者にどのような読みをもたらすのかが理解でき、自身はもとより学習者の読みの把握も可能となるからである。

文学研究における〈語り〉あるいは〈語り手〉の意味と、そのこととの文学教育研究との関わり方。本稿ではこれらについて、志賀直哉「小僧の神様」(大正九年一月『白樺』)の作品分析を元に述べてみたい。

一 「仙吉」の思考とその内実

「小僧の神様」という作品は、秤屋の小僧仙吉と貴族院議員Aによる、「鯨」をめぐる出来事と、それについてのそれぞれの内面化の様相が、三人称の語り手によって語られている。そのため、読者の読みはこの三者、仙吉、A、語り手を中心に展開していくこととなる。

まず、仙吉について見ていく。

若い番頭からは少し退つた然るべき位置に、前掛の下に両手を入れて、行儀よく坐つて居た小僧の仙吉は、「ああ鯨屋の話だな」と思つて聴いて居た。京橋にSと云ふ同業の店がある。其店へ時々使に遣られるので、其鯨屋の位置だけはよく知つて居た。仙吉は自分も番頭になつて、そんな通らしい口をききな

がら、勝手にさう云ふ家の暖簾をくぐる身分になりたいものだと思つた。

(一)

ここに見られるのは、番頭より控えめな所作で、商家内の序列を忠実に守る仙吉の姿である。そして、紅野謙介氏の「仙吉にとつて「すし」とは、私たちが食べたことのある実際の鮪よりも、別の記号性を帯びて」おり「彼らの「身分」と結びついた文化を暗示する記号であつたに違いない」という指摘や、山口直孝氏の「仙吉の発想において、鮪と「番頭」の地位とが密接に繋がっている」という見解があるように、仙吉にとつての鮪とは、やがて「番頭」になること、あるいはそういう身分に不可欠な要素として彼に認識されている「通」になることの象徴である。

そのため彼は背伸びをして、ある日の使いの帰りに鮪を食べようと試みる。

其時不意に横合ひから十三四の小僧が入つて来た。小僧はAを押し退けるやうにして、彼の前の僅な空きへ立つと、五つ六つ鮪の乗つてゐる前下がりの厚い樺板の上を忙しく見廻した。

(中略)

小僧は少し思ひ切つた調子で、こんな事は初めてぢやないと云ふやうに、勢よく手を延ばし、三つ程並んでゐる鮪の鮪の一つを摘んだ。所が、何故か小僧は勢よく延ばした割に其手をひく時、妙に躊躇した。

「二つ六錢だよ」と主が云つた。

小僧は落すやうに黙つて其鮪を又台の上へ置いた。

「二度持つたのを置いちゃあ、仕様がねえな」さう云つて主

は握つた鮪を置くと引きかへに、それを自分の手元へかへした。小僧は何も云はなかつた。小僧はいやな顔をしながら、其場が一寸動けなくなつた。然し直ぐ或勇氣を振るひ起して暖簾の外へ出て行つた。

(三)

仙吉にとつて「番頭」という地位と密接に結びついた鮪を食べることは、分不相応な行為、言わば身分の越境であつた。そのためここには、「Aを押し退けるやうにして、彼の前の僅な空きへ立つ」「勢よく手を延ばし」というその時の彼の意気込みと、「勢よく延ばした割に其手をひく時、妙に躊躇した」という土壇場に来ての戸惑いが示されている。結局、仙吉が四銭しか持つていなかったために企ては失敗してしまうのだが、それは「番頭」と「小僧」との間で決して埋まらない差があるからであり、それを自覚した仙吉は再び「小僧」として生活していくことを決意する。「或勇氣を振るひ起して暖簾の外へ出て行」というのはそのことを示している。

後日仙吉は、その場に偶然居合わせた貴族院議員Aによつて、「鮪」をおごつてもらふ機会に恵まれる。「大変うまい話のやうな、少し薄気味悪い話のやうな気がし」ながらも御馳走してくれることが「何しろ嬉しかった」(一六) 仙吉は、「見得も何もなく、食ひたいやうにして鱈腹に」鮪を味わつた(同)。次の引用は、その後の彼の思考である。

兎に角あの客は只者ではないと云ふ風に段々考へられて来た。自分が屋台鮪屋で恥をかけた事も、番頭達があつた鮪屋の噂をしてゐた事も、その上第一自分の心の中で見透して、あんなに充分、御馳走をして呉れた。到底それは人間業ではないと考へ

た。神様かも知れない。それでなければ仙人だ。若しかしたらお稲荷様かも知れない、と考へた。

(八)

Aが仙吉を連れて行つた店が番頭達が噂をしていた店であつたことは偶然の一致である。また、仙吉に鯨を好きなだけ食べさせることも、今回がお礼の意味を込めたものであり、Aが仙吉を見かけたのが鯨屋であつたことを考えれば、納得のいくことである。しかし仙吉はそのような分析的な思考はできず、自分に「鯨」を存分に食べさせてくれたAを、「神様」や「仙人」、あるいは「お稲荷様」と意味づけるようになる。自身に理解できないことを超常現象として把握しようとする仕方であり、そこには仙吉の子供らしさがかうかがある。

二 Aの「淋しい感じ」とその根因

Aは、議員仲間のBから「鯨の趣味は握るそばから、手摺みで食ふ屋台の鯨でなければ解らない」(二三)と「通」を説かれ、屋台鯨屋に向かった。だが、普段の彼の生活において鯨は、細君の「其お鯨電話で取寄せられませんの？」(七)、「自家へ取り寄せれば」(九)という言葉からもうかがえるように特別なものではなく、所望すれば出前でも気軽に入手できる食べ物である。それ故、鯨を食べることに對しての執着は、仙吉の方が強い。「Aを押し退けるようにして、彼の前の僅な空きに」入つてきた仙吉に對して、Aは屋台鯨屋の前で「一寸躊躇し」、「思い切つて兎に角暖簾を潜つたが、其立つて居る人と人との間に割り込む気がしなかつた」。しかし、積極的な仙

吉が鯨を食べられなかつたのに對し、消極的なAの方は食べる事ができた。それは、両者の経済力の差によるものである。Aが鯨屋に向かう背景には仙吉と同様の「通」への憧憬も指摘できるが、基本的にはAと仙吉には身分・階級に拠る差異を見るべきであろう。¹⁰

この出来事がAに、仙吉に鯨をご馳走することを意識させるのだが、それでもAは積極的に事を運ぼうとはしていない。

Aは其時小僧の話をした。そして、

「何だか可哀想だつた。どうかしてやりたいやうな気がしたよ」と云つた。

「御馳走してやればいいのに。幾らでも、食へるだけ食はしてやると云つたら、嘸喜んだらう」

「小僧は喜んだらうが、此方が冷汗ものだ」

「冷汗？　つまり勇氣がないんだ」

「勇氣かどうか知らないが、兎も角さう云ふ勇氣は一寸出せない。直ぐ一緒に出て他所で御馳走するなら、まだやれるかも知れないが」

「まあ、それはそんなものだ」とBも賛成した。

(四)

ここでAが言う「冷汗もの」の行為とはもちろん、その場で仙吉に鯨をご馳走することであるが、それはBにとっては「勇氣」が要る行為とされている。これにAは、「勇氣かどうか知らないが、兎に角さう云う勇氣」と部分的に否定しながらも、Bの「勇氣」という捉え方を認めている。また逆に、「直ぐ一緒に出て他所で御馳走するなら、まだやれるかも知れないが」というAに對して、今度

はBが「まあ、それはそんなものだ」と「賛成」している。二人は一応の共通認識があると見てよい。

ではなぜ、Aあるいは彼らはその場で仙吉に鯨をご馳走できないのか。「六」で、秤屋で秤を購入した後でも鯨屋に行き、「又来て呉れないと、此方が困る」と女将が言うほど代金を払うことができたのだから、持ち合わせの有無は理由として考えにくい¹¹。であれば、その状況が問題であったということになる。また、Aに「通」と思われた先客たちが数人いる屋台では奢ることができなかったという可能性も考えられるが、Aにとって「通」への先達であるBも「まあ、それはそんなものだ」と同意していることから、別の理由が必要になる。そこで導き出されるのは、「御馳走する」行為を周囲の人に見られたくないということ、換言すれば自分たちが他人に鯨を奢ることができるといふ富裕層であることを見せびらかしたくないということである。Aが「名を知らしてから御馳走するのは同様如何にも冷汗の気がした」ために、秤を買う時に「出鱈目の番地と出鱈目の名」を書いた(五)のも、そのためである。また、「直ぐ一緒に出て他所で御馳走するなら、まだやれる」というのは、周囲を気にせず小僧に奢ることのできるような店においてであればできるという意味だったのであり、事実彼が仙吉を連れて行ったのは、二人が出会った屋台鯨屋ではなく、「松屋」の近所の「或小さい鯨屋」であった。先日の屋台鯨屋では自分も小僧も気まずさを覚えるし、「松屋」の近所の「或小さい鯨屋」の方が勝手が分かっていたためであろう。

だがこれはその時点で、Aに「自分のした事が善事だと云う変な

意識」(七)、つまり偽善の意識が無自覚的に漠然と在ることを意味するのではないか。そして後日仙吉に鯨を奢ることで、それが顕在化したと言えないだろうか。Aは、仙吉に鯨を奢れば「小僧も満足し、自分も満足していい筈」(七)と考えていたが、逆に「変に淋しい、いやな気持」(ク)に苛まれ、自己分析を行う。そしてその気持ちの原因を「自分のした事が善事だと云う変な意識があつて、それを本統の心から批判され、裏切られ、嘲られて居る」ため(ク)としている。ここで彼は、自己を客観視するもう一人の自分を想定することで自己の正当化・安定を図ろうとしているのである。しかし、この認識は合理化¹²であり所詮逃げに過ぎず、彼に本質的な解決をもたらすことはなかった。ゆえに、その直後Bの家に向かいBと会つてもこの事を話さず、Y夫人の音楽会に行くことで直つたとはあるものの、以後はその鯨屋を避けるようになり、細君が話題に上げて「笑いもせずに」、「俺のやうな気の小さい人間は全く軽々しくそんな事をするものぢや、ないよ」と答えるだけ(九)なのである。

三 「附記」の意味——〈語り手〉と「作者」——

前二節で仙吉とAとを見てきたが、この作品で特に重要と思われるのが、この二人の人物が語り手によってどう語られているのか、あるいは二人の人物を語る語り手の意識はどのようなものなのかということである。それは、「小僧の神様」の先行研究の大半で触れられてきた、十章の後に付けられた「附記」の意味を考えることで明らかになると思われる。

作品の構造について、亀井雅司氏による早い時期での指摘がある。¹⁴⁾

この作品は十章と附記とからなる短篇であるが、小僧とAとが出会う場面をもつ三章と六章は別として、一章二章は小僧の側が描かれ、四章五章は反対にAの側が描かれていて、更に七章以後十章まではAと小僧の立場から交互に描かれるという整然とした構成をとっているのである。

また、森下辰衛氏も、同じ問題に対して次のように述べている。¹⁵⁾

また、小説の構成に関しても、仙吉とAとが交互に視点人物になる構成ではあるが、作家の意識はAに偏重しているとされる。それも作家自身の投影の濃さの問題として処理され、ここでも比較的否定的な見方が多く出されているが、これも志賀ⅡAで志賀Ⅱ仙吉という勘違いが引き起こしていることに過ぎない。仙吉が「仙吉」と呼ばれる（Aは「客」「あの客」等の呼び名になる）章が五つ、議員Aが「A」と呼ばれる（仙吉は「小僧」と呼ばれる）章も五つで拮抗し、そういう点では偏重はないのである。

森下氏には亀井氏の論の引用が見られないが、氏の見解は亀井氏の延長に位置づけられよう。ここで両氏は、仙吉の側からの視点とAの側からのそれは同じであり、語り手は二人の登場人物に対して平等であるという見解を示している。基本的には同意するのだが、まだ考察の余地があるように思われる。

そこで、あらためて本作品の構成を整理してみたい。次の表は、各章の視点人物を◎、語られる（見られる）人物を○として表したものである。

人物	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
仙吉	◎	◎	○		○	◎		◎		◎
A			◎	◎	◎	○	◎		◎	
										5(1)
										5(2)
										◎(○)

これから分かるように、三章と六章は仙吉とAが同じ場面において、この二つの章だけで見ても視点が交互になっている。そして三章、六章以外はどちらか一方の人物しか語られていない。ここまでは亀井氏の言う通りである。だが、視点人物はAである五章に、「仙吉はAを知らなかった。然しAの方は仙吉を認めた。」という一文が存するのは見逃せない。これを加味した上で整理すると、全十章は、森下氏の言うように各人物の視点による章は五章ずつであり、拮抗せず変調がないように見えるが、○の数から、わずかな差ではあるが仙吉の方がAよりも語られる人物・見られる人物としての性格が強いということが言える。それは、語り手がAの視点・立場から仙吉を見ている章が多い、ということの意味する。

これに関わると思われるのが、これも先行研究で多く取り上げられる、「附記」における「見せ消し」である。この理由には、別の結末の可能性を敢えて示すことよって「附記」以前で物語を終える妥当性を付与するため、というものと、Aが書いた「出鱈目の住所」に「小さい稲荷の祠」があった場合仙吉に対して「少し残酷」なため、というものと二つが考えられるのだが、肝心なのは後者の方である。仙吉に対して「残酷」というのは、まずは、Aが書いたためたための住所には、こらがあつたとした場合、仙吉がAをこの世に実在しない完全な神様であると認識してしまい、再度現れてくれ

るといふ期待を持ってなくなる、という解釈もできる。だが、偶然の重なりによる出来事を超常現象として理解してしまう、幼さの残る仙吉を鑑みた場合、これは妥当ではないようだ。それよりも、仙吉がそのような純粋な存在であるが故に、自分の偽善性を意識しながらも抛擲してしまうAを「神様」のような存在とは認識してほしくないと言語手が考えている、と理解する方が良さそうである。このとき、この作品のタイトルの二重性をもつことがわかる。すなわち、小僧の視点から物語を見た場合の、Aを意味づける言葉としてのへ小僧にとつての神様へ、またその逆の、Aの側に立つ語り手が仙吉の純粋性を意味づけるへ小僧の姿をした神様へ、ということである。¹⁶

ところで、「附記」において「作者」と自称する存在は、正確には語り手と言うべきである。しかし、これまでの研究において、それが峻別されていたとは言い難い。これには、文学研究における作家論という方法論の問題、白樺派文学・あるいは心境小説としての志賀文学の位置づけというものが、より具体的には、志賀文学の研究では避けて通れない「創作余談」¹⁷の存在、影響があるためである。例えば栗林秀雄氏は「作者志賀にとつても「小僧」は「神様」なのである。それ故に、作者は、「小僧に対し残酷な気がして来た」と付言せざるをえなかったのである。(中略)このとき、「A」は志賀となり、志賀は「A」となって、作中人物に作者が同化したのである。」と述べているし、¹⁸また鶴谷憲三氏も「結果において手を拱ねていた自身へのへこだわり」を、作品中の貴族院議員Aに託し、ありうべき自己の姿として吟味するというモチーフ」が読み

とれ、「こだわりを抱いた自己の内面を作品の中で裏付けることの方に力点があつたのではなからうか。」というように、Aと志賀とを同一視する思考がある。¹⁹

しかし、先に分析したように、作家志賀直哉(作者ではなく)を持ち出すまでもなく、「小僧の神様」における語り手はAの側に寄り添っていることは明らかである。中には、林廣親氏のように、先行研究は「志賀文学における他者の存在の希薄さ」という作家論的通念におのずから回収され、それを補強し続ける結果を生んでいる。」と、作家志賀と読みとを分けようとする試み²⁰も存するものの、各論の発表年月から、この問題は現在も同様であると思われる。

このような状況の原因を、下岡友加氏の論功²¹を手がかりに考察してみたい。

明治四十三年から昭和三十八年まで、約五十年余りの期間に発表された志賀直哉の全小説は、語りのパースペクティヴから、ジェラール・ジュネットの言う焦点化ゼロの物語言説と内的焦点化の物語言説に二分化できる。

前者の例としては「正義派」(大元・9)、「清兵衛と瓢箪」(大2・1)、「范の犯罪」(大2・10)、「赤西蠣太」(大6・9)、「小僧の神様」(大9・1)などが、後者の例としては「網走まで」(明43・4)、「大津順吉」(大元・9)、「和解」(大6・10)、「暗夜行路」(大10・1)、「昭12・4)、「灰色の月」(昭21・1)などがあげられる。なお、志賀の小説には外的焦点化に該当する例はない。(点線も引用者)

下岡氏は、志賀直哉の全小説は、ジェラール・ジュネットのいう

焦点化ゼロの物語言説と内的焦点化の物語言説に二分化でき、今回の「小僧の神様」は前者に当たると述べている。ジュネットの「焦点化ゼロとは、『全知の語り手による物語言説』あるいは「背後からの視像」のことであるが、ジュネットは「物語言説は必ずしも、終始一貫して同じ焦点化を選択し続けるわけではない」とも述べている。²³つまり、語り手が特定の登場人物に寄り添ってしまうことはあり得ることで、ここから考えれば、先に見た先行研究の状況は「小僧の神様」の語り手がAに寄り添うことに起因することが理解できるが、それは換言すれば、この作品が三人称小説でありながら実は潜在的一人称小説であるということ、さらには、例えば漱石の「坊っちゃん」における語り手のような、昔の自分を客観的に物語るような視点を持ち得ていないということである。

仙吉に「残酷」にならないように「摺筆」したという「附記」をつけたことにより、「小僧の神様」の語り手は、Aの側で物語を語る潜在的一人称の語り手であることを露呈させている。それは実は「附記」において、仙吉に対して「小僧」というAの側からの呼び方を無意識的に選んでいることにも、如実に現れているのである。

四 語りと（読み）——志賀作品と教材化——

見てきたような、志賀文学、あるいは「小僧の神様」の語りは、教材という視点ではどう意味づけられるのだろうか。本節ではこれについて考察する。

語りと文学教育とを有機的に論じる研究者の一人として田中実氏

の名を挙げるができる。氏は小説について述べる中で、次のように言う。²⁵

私は、日本の近代小説の登場人物の裏には全て「語り手」が生きていて、他者の引用ではなく「語り手」の自意識に取り込まれていると考えている。私見では、小説は「物語＋語り手」の自己表出」であり、会話にも「語り手」が自己表出している。「物語」とは一つ世界であり、会話の文にも「語り手」は隠れ、「物語」を進行させている。天才腹話術師いっこく堂の比喩を使ってきたのは、彼が複数の人形を使い分けるように、「物語」の人物の背後には「語り手」がいて、この「語り手」がAを等身大に語ると、Bは語れなくなることに、ここに近代小説の秘密、日本の文化土壌と《他者》の問題、すなわち《わたしのなかの他者》と了解不能の《他者》があると考えてきたからである。

田中氏が示すのは、日本の近代小説のみならず現代小説にも、また一人称小説・三人称小説のどちらにも当てはまる、小説Ⅱ「物語＋語り手」の自己表出」という考え方である。換言すれば、小説と単なる物語との分かれ目は、語り手が語るべき物語を相対化できているか否かにあるということになる。先にも例に挙げた「坊っちゃん」で述べれば、当時の「おれ」や「清」、「おやぢ」、「兄」を、現在の語り手「おれ」は、客観的に、距離をおいて語ることができているということである。これは、一人称小説であっても語り手が自身を相対化できる場合があること、逆に三人称であっても語り手が登場人物を相対化できないことがあることを示している。²⁶

「小僧の神様」は、まさにこれに該当する。

そして、ここに関連して、語りが文学教育とどう関わってくるのかということが問題になる。これについても田中氏の見解を参照したい。

私は読みにアナキーな覇権を説く石井洋二郎氏の「誤読の領分」(『文学』二〇〇三・七、八)を積極的には認めることはできません。「読むこと」とは拘束された読み手の現象を認識する行為であり、読み手自身の内面を構築していくことであります。「極点」の向こう側を折り返し、「読むこと」の「実体性」を捉え、その虚偽を超えながら、これに読み手自身の生の在処、あり方を問うのです。そこに「読むことの倫理」の地平が現れてきます。このとき読書行為は了解不能の《他者》を捉えている自身がその行為によって瓦解し、倒壊することを条件にしています。読者主体の《自己倒壊》を前提にしていると言つてもよいのですが、これを《知的了解》に終わらせると、《自己倒壊》とは無縁です。これが同時に日本語の臨界に挑む《ことばの仕組み》に向かうこととなつて、近代小説の再稼働が始まります。²⁷

簡単に言うと、《語り手》は複数の登場人物に成り代わり、登場人物の直接話法を行使するが、その裏には一人の《語り手》が息付いていて、これが《語り手》と複数の登場人物の關係に表出している。したがって、小説を読むにはその他者性を抽出することが必須である。その際、注意したいのは小説によ

つてさまざまな《語り手》が違ったかたちで機能していることである。例えば、登場人物と一体化した移動する《語り手》、登場人物を批評する《語り手》、登場人物を抱え込む《語り手》などである。また小説によっては、語り、語られる關係を超えて、全体を統括する機能が考えられる場合が少なくない。これを《語り手を超えるもの》と呼んでいる。これは《語り手》を對象化し《語り》の向こう側を推測することで開けてくる。こうした読みの作業が小説本来の立体空間として構造化する。²⁸

「文学を「読むこと」とは、拘束された読み手の現象を認識する行為であり、読み手自身の内面を構築していくこと」であり、読み手の内に《実体性》として在る「了解不能の《他者》」を通して「自己倒壊」が起こることである、さらに、「小説を読むにはその他者性を抽出することが必須である。」とある。これを教師が日々の授業のなかで保証するためには、語り手を、あるいは語りを相対化させ、生徒に、語り手が登場人物をどう語っているのかを考えさせることが必要となる。

ところが志賀文学の場合、その特質ゆえの難しさがある。語り手が物語を對象化(客観化、距離化)できておらず、むしろ自身もその物語に入り込む、あるいは《語り手》と語られる登場人物との距離が無いからであり、田中氏が「志賀直哉の小説は散文詩と同じ」で「語り手が語る物語に対してメタレベルに立たず、一体化して詩を創出するようにして語っている」、「あるいは心境小説として語っていく」と述べるのはこれである。語りを軸とした文学教育においては、志賀直哉の文学作品は限界があるということになる。²⁹

五 おわりに——文学作品の語りと教材化——

授業で扱う教材の良否は一概には言えないが、授業の目標・ねらいに適した教材であるべきだとは言える。であるならば、文学教育における優れた教材、つまり小説の読みにおいて優れた教材とは、再読や他の学習者によって自身の読みが相対化されやすいものといえることができるだろう。しかし、冒頭で触れたように、文学の読みの原理的研究の余地がまだ多く存する現在、優れた教材と呼ぶに相応しいものを見定めることは難しい。また、仮に優れた教材を用いたとしても、授業が「語り」や「語り手」を指摘するにとどまったのであれば、読みの授業としての意味は半減する。文学の読みの原理的研究は、教材研究だけでなく授業研究の質をも、われわれに要求するものである。

佐野正俊氏は、田中氏の見解を踏まえて次のようにいう。

読者の読みを開き、その認識のありようを問うためには「作品」と「読者」という二元論を超えることが求められる。そのためには、まず「作品」とは（非実体）であり、読みとはどこまでいっても「わたし」のなかの他者」にはかならないという相対主義（テキスト論的転回Ⅱ第一の転回）を徹底的に受けとめることが必要である。読むことは（実体）そのものにはたどりつくことはできない（読むことに正解はない）のである。しかし、読者は「作品」に働きかけられていることは否定できない。このような働きかけを（実体性）の働きかけとして問題に

すること、すなわち読書行為に（実体）ではない（実体性）という「了解不能の（他者）」の領域を措定すること（文学教育の転回Ⅱ第二の転回）によって初めて、「教育」の問題が立ち現れてくる。「わたし」の読みは（真）ではないが、さりとて（虚妄）ではない。このことの自覚が、（善）なる読み、（美）なる読みの永続的な追求、すなわち読むことによる文化の「創造」や「発見」という「文学教育の希望」への道筋を開いていく。

佐野氏は、（読み）を（実体）ではなく（実体性）の問題として扱うことの重要性和、それを扱う際に（語り手）がポイントになるということ論じる。この実現のためにも教師は、その教材を扱う意図・目的に対して常に自覚的で、教科書採録も含めた教材研究をおろそかにしないことに意識的であるべきだ。至極当たり前のことであるが、その原点を忘れてはならない。文学教育、ひいては文学研究の根本を問い直す営みが、今最も必要なのである。

注1 五味湖典嗣「〈国語の時間〉との対話」（平成十九年三月「日本文学」）

2 例えば須貝千里「それを言ったらおしまいだ。——価値絶対主義と文学の力——」（田中実・須貝千里『「これからの文学教育」のゆくえ』、平成十七年七月、右文書院）など。

3 渋谷孝『文学教育論批判』（昭和六十三年十月、明治図書）

4 紅野謙介「格差をめぐるファルス——志賀直哉の短編を読む」（平成二年九月『月刊国語教育』）

5 山口直孝『「小僧の神様」論——Aと仙吉との関係をめぐって

—(平成七年九月「日本文藝研究」)

6 林廣親氏「志賀直哉「小僧の神様」を読む」(平成十一年三月「成蹊国文」第三十二号)にも、仙吉の行為について「未知の味への抑えがたい食欲にとりつかれたあげく冒険的なへ越境へをあえて試みてしまう」という指摘がある。しかし、仙吉の行為は「番頭」や「通」への憧憬から発した部分もあって、成長期の少年にありがちな「抑えがたい食欲にとりつかれた」ためという点のみには回収できないと思われる。

7 この時の仙吉の内奥については、手持ちの四銭で足りるかどうかの心配も想像できるが、それならば事前に値段を尋ねるだろう。また、最初に「海苔巻はありますか」と聞いてもいるが、本当に仙吉が海苔巻きを所望していたのであれば、主の返事を受けた後に店外へ出ているはずである。彼は、番頭達が噂をしていた鮪が食べたかったのである。

8 紅野謙介氏は仙吉について、「低賃金による労働力として経済活動を支えている社会的存在」で、「子供ではあるけれど、決して無邪気で無垢な「子供」たりえない」、「労働者」であると説いている(前掲注4参照)。しかし後述するように、Aには「十三四の小僧」(三)に見えた仙吉は、この作品においては「労働者」としてではなく、理解不能な出来事を神様の仕業だと考える子供として語られている。そこには「語り手」のある意図がうかがえるのである。

9 山口直孝氏(前掲注5参照)は、「秤屋の小僧仙吉と貴族院議員Aという、社会的立場を全く異にする二人が鮪屋へ赴くの

は、共に「通」への関心に導かれてのことだった。」と指摘している。

10 紅野謙介氏(前掲注4参照)がいうAとBの「陋巷趣味」は、ここに関連する。

11 秤を買うつもりで外出したのだからこの時は余分に金銭を準備していたということも予想されるが、屋台鮪屋に食べに出かけたときも状況は同じはずである。

12 Aに「通」を説いたのも、「屋台の旨いと云ふ鮪屋」(三)を教えたのもBであるから、これは過言ではないと思われる。また、現在のものと安易に結びつけることはできないが、「荒糲」(大正十年二月、春陽堂)に収録される際に削除されたが、初出では、「Aは笑ひ出した。」(四)と「Aは其時小僧の話をした。」(同)の間に、「本統だ」／「そんなら客に左うして食はれる鮪屋は侮辱されるわけだね」／「左う云ふわけになるが、今は習慣になつて居るから、オリヂナルの意味はなくなつて居るのさ」という二人の会話が挿入されていた。

13 ここでの「合理化」とは、心理学でいう心的規制(防衛規制)の一つである。「心理学事典」(平成十一年一月、中島義明他、有斐閣)には次のようにある。

葛藤や罪悪感を伴う言動を正当化するために社会的に承認されそうなる理由づけを行う試み。精神分析によって明らかにされた心的規制の一つである。合理化が成功すると不安や葛藤は解消され、言動の真の意味は意識化されないと
いう。

14 亀井雅司「志賀直哉の短編——その構想——」（昭和四十六年四月『国語国文』）

15 森下辰衛「小僧の神様」論（平成三年十二月『近代文学論集』第十七号）

16 栗林秀雄「志賀直哉論ノート（二）——「范の犯罪」と「小僧の神様」の試み——」（平成八年二月『日本文学研究』第三十五号）にも、「この作品の題名の助詞の「の」は、へ同格を示す」「の」として読むことができるのであり、へ小僧イコール神様」と読解し、則ち、「小僧にとつての神様」、「小僧の抱いた神様」ではなく、「A」にとつて小僧は、自己を照らし映し出す鏡の如き神様として存在し続けるのである。」という指摘があるが、栗林氏は「志賀文学には、助詞の「の」を題名にした作品が多数あり、その「解釈の仕方に問題を見出すことができる作品がいくつもある」と述べた上で考察を進めており、本稿とのプロセスは異なる。

17 志賀直哉「創作余談」（昭和三年七月「改造」、同年同月『現代日本文学全集 志賀直哉集』改造社）。「小僧の神様」に関する記述の全文は以下の通りである。

「小僧の神様」屋台のすし屋に小僧が入つて来て一度持つたすしを値をいはれ又置いて出て行く、これだけが實際自分が其場に居あはせて見た事である。此短篇には愛着を持つてゐる。

18 前掲注16参照。

19 鶴谷憲三「小僧の神様」小論（昭和六十二年一月『解釈と

鑑賞』）。また、引用の後には、「真の主人公と考えられる貴族院議員A」という表現も存する。

20 前掲注6参照。

21 下岡友加「小説の人称——自分・私・彼——のあいだ——」（『志賀直哉の方法』、平成十九年二月、笠間書院。原題「志賀直哉の小説における人称——自分・私・彼——のあいだ——」（平成十七年十二月『国文学攷』第188号）

22 ジェラルド・ジュネット『物語の詩学』（和泉涼一・神郡悦子訳、一九八五年十二月、書肆風の薔薇）

23 ジェラルド・ジュネット『物語のディスコース』（花輪光・和泉涼一訳、一九八五年九月、書肆風の薔薇）

24 「潜在的一人称小説」とは、金子明雄「三人称回想小説としての『道草』（『漱石研究』第4号、平成七年五月、翰林書房）における、漱石の『道草』における語りを指している仮説である。「道草」は漱石の自伝的小説という側面を持ち、発表当時漱石は自然主義に歩み寄つたとさえ評された。自然主義文学における告白性、あるいは漱石文学の自我の問題の影響を指摘される志賀文学にも、金子氏の指摘は有効であるように思われる。

25 田中実「消えたコーヒーカップ」（平成十三年十二月『社会学』第16号）

26 この点について、拙稿「読むことと教材をめぐる——すやまたけし「素顔同盟」を例として——」（平成十九年十二月『月刊国語教育』）でも扱っている。

27 田中実「講演 『舞姫』の新しい読み方(上)——機能としての「語り」——」(平成十九年一月『鷗外』80号)

28 田中実「原文」という第三項——ブレ「本文」を求めて——(田中実・須貝千里『文学の力×教材の力 理論編』、平成十三年六月、教育出版)

29 大槻和夫・田中実・須貝千里「小説の「読まれ方」に対する「読み方の提起」、「語り」の問題」(田中実・須貝千里『これらの文学教育』のゆくえ、平成十七年七月、右文書院)

30 田中実・須貝千里『文学の力×教材の力 理論編』(前掲注28参照)掲載の「卷末資料 中学校国語教科書小説教材一覧表」によると、志賀作品の教科書採録状況は次の通りである(丸数字は掲載学年)。

○「小僧の神様」

- 中教出版① 昭和25年～同28年
- 三省堂③ 昭和26年～同30年
- 中央書籍② 昭和28年～同32年
- 二葉② 昭和30年～同36年
- 秀英出版③ 昭和31年～同36年
- 大日本図書③ 昭和37年～同40年
- 教育図書研究会③ 昭和37年～同43年
- 「清兵衛と瓢箪」(最新)
日本書籍② 昭和44年～同52年
- 「正義派」(最新)
東京書籍② 昭和53年～同55年

○「宿かりの死」(最新)

三省堂② 昭和56年～同58年

これによれば、「小僧の神様」あるいは志賀作品の採録は近年ほとんど見られない。最も新しいものでも、「宿かりの死」の、昭和五十六年から五十八年までである。この実態が志賀作品の語りの問題と無関係であるとは言い切れないのではないか。また、高校教科書では依然として「城の崎にて」の人氣が根強いが、これは心境小説という扱ひでの採録であり、語りを捉えるための教材ではない。

附記「小僧の神様」の引用は、『志賀直哉全集』第三卷(平成十一年二月、岩波書店)に拠った。なお、本稿は、第四十八回広島大学教育学部国語教育会(平成十九年八月十一日、広島大学)での発表を基に、加筆・修正したものである。当日貴重なご意見を賜った諸氏に御礼申し上げる。

(近畿大学附属福山高等学校・中学校)